アウシュビッツ 市民の目線で

江別の樋口さん あす札幌で視察報告

江別市野幌若葉町の主婦で、ミニコミ誌「銀河通信」を発行する樋口みな子さん(65)が20日、7月に訪れたポーランド・アウシュビッツ強制収容所の報告会を札幌市内で開く。憲法解釈の変更による集団的自衛権の行使容認などで戦後の平和路線が曲がり角にある中、樋口さんは「市民の目線で戦争の悲惨や狂気を多くの人に伝えたい」と話す。

ナチス・ドイツによるユダヤ人大量虐殺の現場は、中学生の時に「アンネの日記」を読んで以来、一度は訪れたいと思っていた場所だった。ガラス越しの部屋一面を埋める靴の山と天井まで積み上がった髪の毛。何人分あるのか想像もつかなかった。解放される日を夢見たのか、住所や名前を書いたかばん…。「あまりの生々しさに衝撃を受けた」と振り返る。

現地で出会ったドイツ人の大学生は「子供の時から繰り返しこの悲劇を学んでいる」と話した。翻って日本人は過去の戦争を直視してきただろうかと自問した樋口さん。「一見紳士に見える人がこんな蛮行に及んだことを忘れてはいけない」と話してくれた日本人ガイドの言葉に、「だからこそ、私のような普通の市民が見たこと、感じたことを多くの人に伝える意味がある」と報告会を思い立った。

「銀河通信」は1988年創刊。環境問題やハンセン病などの人権問題、太平洋戦争中の沖縄の集団自決問題などを取り上げ、全国規模の機関誌コンクールで優秀賞に輝いたこともある。今年8月の184号ではA4判8ページにわたりアウシュビッツの旅を報告した。

報告会は20日午後2時から札幌市中央区南1西5のさっぽろ自由学校「遊」で。参加費500円。問い合わせは「遊」☎252・6752へ。（関口裕士）

㊤報告会で紹介するアウシュビッツの写真を前に話す樋口みな子さん。「若い人たちにこそ悲惨な歴史を知ってもらいたい」
㊦虐殺されたユダヤ人のものとみられる大量の靴（樋口さん提供）

札幌
■ニュース・話題は
報道センター
電話 210・5555
FAX 210・5556
sapporo@hokkaido-np.co.jp
■ご購読の申し込みは
0120・464・104
■広告の問い合わせは
広告局 210・5710